

和歌山県立博物館

夏休み子ども向け企画展「きのくにのかたな-和歌山県立博物館の赤羽刀-」 展示のみどころ

【赤羽刀について】

日本がアジア・太平洋戦争に敗れたのち、日本刀は武器として、個人が所蔵していたものを中心に、連合軍占領軍に没収されました。その大半が、海洋投棄などにより処分されましたが、一部の美術的価値がある作品が、廃棄をまぬがれて東京都北区赤羽にあった米第8軍兵器補給廠ほきゅうしょうに集められます。その後、日本に返還され、所有者が判明したもの以外は、昭和22年(1947)に東京国立博物館へ移されて、保管されることになりました。この約5,600本の日本刀せつしゅうとうけんるい(接收刀剣類)は、最初の集積地にちなんで「赤羽刀」とよばれます。平成7年(1995)に「接收刀剣類の処理に関する法律」が成立したことにより、元の所有者へ返還したものを除く4,569本が国と地方の公立博物館で活用することになりました。地方に譲与されることになった3,209本のうち、和歌山県立博物館では平成11年(1999)に43本の日本刀の譲与を受けました。これらは、ほとんどが江戸時代にきのくに-和歌山県で作刀していた文珠鍛冶もんじゆかじと石堂鍛冶いしどうかじの作品です。その後、平成17年(2005)までに、作業が困難な8本を除く35本が、県内の研師とぎしの方などに依頼して研ぎ直しが行われ、かつての輝きを取り戻しています。

(1) 文珠鍛冶のかたな

文珠鍛冶の代表的な刀工である初代・文珠重国しげくには、大和国やまとのくに(奈良県)の出身で、隠居後に駿府城すんぶじょう(静岡市)にいた徳川家康に仕え、家康没後、紀伊国に転封された徳川頼宣よりのぶに仕えて、和歌山城下でお抱え刀工として活動しました。江戸時代を通じて、11代にわたり作刀していたことが知られます。初代・重国の作品は、バランスのよい美しい反り姿そで、大和の伝統的な作風である直線的な直刃すくはのものが中心です。



脇指 銘「於南紀重国造之」(展示番号3)

(2) 石堂鍛冶のかたな

紀州の石堂鍛冶は、近江国蒲生郡おうみのくにがもうぐん(滋賀県東近江市)の石堂寺の門前において作刀していた流派の一部が紀州へ移り、徳川頼宣に仕えた刀工集団です。17世紀の中ごろまで紀州で活動し、その後、江戸・大坂などへ移り、各地で分かれて作刀を続けたようです。紀州の石堂鍛冶の作品は、反りが浅く、四角い波の刃文はもん(箱乱れ)を幅広く焼いているのが特徴です。



刀 銘「陸奥守 橋 為康」(展示番号19)

(3) 江戸の人気刀工の作品

大和守安定やまのかみやすさだは、石堂鍛冶の刀工です。一時期和歌山でも制作していましたが、のちに江戸に移りました。作品は「業物わざもの」(良く切れる刀)として有名で、江戸の武士に人気がありました。



脇指 銘「大和守安定」(展示番号22)